

ザクが征く！！鉄血のオルフェンズ

イブ_ib

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1年戦争パイロット、鉄血のオルフェンズ世界に転移する。

目次

消失からの出現	1
遭遇	4
ザク 火星の大地に立つ	7
敵の襲撃部隊を叩け！	13
CGS乗っ取り大作戦	20
グレイズ1機確認	26
宙へ	32
赤い大地 漆黒の宙	35
ヤバいことなら銭になる	38
勇魚取り①	44
勇魚取り②	47
勇魚取り③	50
歳星	54
暗礁	58

消失からの出現

U・C・0079年

12月24日

ソロモン

その基地の一角のハンガーにいるザクに乗っているパイロットの名は、

マサキ・サヤマ(22)

彼は元々宇宙攻撃軍におり、ジオン地上軍にくつついて行った後、地上軍が敗退し、その後ソロモン防衛隊に編入された。

つい先程、連邦軍艦隊を察知した為

モビルスーツ内で待機していたのだが……

「なんだ……?」

突如遙か向こうのほうから、太陽の様な光が差し込んできた。

「いや、これ何?……」

段々と光は強まっていき、地球にいた頃に見た赤道直下の太陽を思い出させるほどの光量となる。

すると

「伍長!! 攻撃だ! 連邦軍のツ!……」

突如こんな通信が入ったと思っただけなのに切れてしまった。

「おう!? どうした?! ……畜生……なんだよ……」

手に汗が滲む

本当なら今すぐここから飛び出したいが、待機命令が出ている以上変な行動はできない。

ビッー! ビッー! ビッー!

コンソールから、異常を知らせる警告が鳴り響く、見てみると機体の表面温度が見る見るうちに高くなって行く。

《やっ、ヤバイ?! ギャアアア! ……》

いきなり隣のハンガーで待機していた僚機からこの様な無線が入り、それが最後になった。

機体が突如何かに押される様に後ろへ下がりはじめ、後ろで待機していた僚機に激突する。

計器から悲鳴が上がり、機内温度も上昇する。

ボンツ!!!

目の前で爆発が起こった、どうやらマシンガンの弾倉に引火して誘爆したらしい。

凄まじいショックがザクを襲い、マサキは頭をぶつける。

あまりの高熱でザクのカメラが溶け、映像も不鮮明になった映像からは眩い程の、其れこそ目が潰れてしまうほどの光が溢れていた。

マサキはその光に包まれる様に、意識を手放した。

U・C・0079年

12月24日

ジオン公国軍MSパイロット

マサキ・サヤマ伍長(22歳)

ソロモン攻略戦での

ソーラーシステムにより戦死。

◆◆◆◆

P・D・32?

? 月? 日

C G S

「このッ!! クソ! このタイミングでかわすかあ!!」
赤茶の荒野の中で、二台のモビルワーカーが闘っていた。

◆◆

「凄かったな今日の模擬戦、ミカはやっぱりすごいよ」

「別に? 普通でしょ」

などというたわいの無いやり取りをしていると、なにやら向こうが騒がしい。

オルガは近くにいたビスケットに声をかける。

「なんだ? 何かあったのか?」

「あ…… オルガ、……なんか見たことが無いMSが見つかったんだって」

「はあ? なんだそりゃ?」

◆◆◆

CGSの面々が、不思議そうに眺める先には、焦げ茶色の荒野に横たわるザクの姿があった。

遭遇

「うう・・・」

マサキは意識を取り戻す。

機内はほのかに室内灯がついてるだけで、電源は入ってないのか、モニターは真っ暗だ。

ぼんやり見える機内を見ると、直前まで

宙を浮いていたペンや飲み物が、機体が背を向けて寝ている為か、壁にあたる場所に転がっていた。

「一体どうなったんだ・・・?」

起きた直前から背中にかかる重力に、ここは宇宙ではなく、地球なのかとぼんやりとした頭で考えていた。

(しかし、自分はソロモンにいた筈、

地球なんて来れっこないのに。

もしかして・・・コロニーか?)

兎にも角にも外に出て確認する為、

ヴァルタp08に弾が入っているかどうか確認した後、コックピットを開けた。

◆◆◆◆◆

横たわるザクの周りには、一番組に命令されて参番組の少年兵達がライフルを持って見張っていた。

すると・・・

「隊長!中から人が!」

「何?」

近くに張っていたテントで待機していたオルガ達は、急いで様子を見に行く。

◆◆◆◆◆

「ここにいる者で一番上の者はだれか?」

ノーマルスーツを着た男が、拳銃を構えて尋ねている。

そこにオルガが参番組の隊長という事で前に出て話を始める。

「隊長は俺だ！ 武器を下ろしてくれ、俺たちに敵意はない！、おい、お前達も武器を下ろせ」

ノーマルスーツの男は拳銃をしまいながらたずねる。

「ではここはどこだ?! コロニーなのか何処なのか? 連邦領かジオン領か?!」

「・・・?、何を言っているのかわからないんだが?」

「ここは連邦の領土か、ジオンの領土かどっちなのか聞いてるんだ」

「・・・その、連邦とかジオンってのがわからないんですが・・・」

マサキは耳を疑う、現在起こってるジオン公国の独立戦争を知らないはずがない。それに地球の片田舎であれ連邦の名は聞いた事ぐらいある筈だ。

「・・・よし、じゃあ此処は何処だ?」

周りは困惑しながら、オルガは答える。

「・・・火星だが・・・」

「火星? 嘘つくな、火星は碌に調査も進んでないと聞けど!」

「オルガ、なんか話が噛み合わないよ、此処は一旦落ち着いてもらってからまた話を聞こう」

ビスケットの提案により、まず最初に

パイロットを落ち着かせることにした。

「襲って来ないという保証はあるんだろうな?」

「下手な事しないならこっちも手をあげませんよ」

ビスケットの説得により、なんとかテントに入れることができた。



テント

「・・・なるほど、マサキさんはジオン公国という国の軍人で、作戦中に謎の光に包まれて気づいたら此処にいた・・・ということですか・・・」
「そういうこと」

「しかし・・・ジオンなんて国は聞いたことがねえな・・・」

「そこだよ、ジオンの名前どころか連邦の名前さえ知らないというのはおかしい」

「連邦」地球圏の全てを支配している組織、そんな打てば響くような名前を彼らは知らない。

その後も宇宙世紀ではなく、P. D. という暦になっていたり、ギヤラルホルンという治安維持組織が存在していたり、厄災戦というものも300年前に起こっていたり・・・この世界の出来事についてマサキは本を持って来てもらって調べていた。

これらを見たマサキは頭を悩ましながら、机に突っ伏した。

ザク 火星の大地に立つ

それから数ヶ月後

ここのCGSの社長と話し合い、取り敢えず転移者という事は隠して放浪者を拾ったという扱いで、(MS一機もってて何が放浪者なんだか)CGSに勤めることとなった。

今の仕事はもっぱら参番組の訓練を受け持っている。

「頭を低く！ そう！ ちがう！ もつと兎に角低く！」

少年兵は使い捨て同然の扱いを受けている、最初にその事を知った時は愕然としたがならば少しでも生き残れる様にと

銃撃戦や白兵戦の訓練を教えていた。

(そろそろの飯の時間か・・・)

毎日、この時間が来るとマサキは複雑な気持ちになってしまう。

「よ・・・よお、昼の時間ですぜ マサキさん」

馴れ馴れしく話しかけてくるこのトドとかいう男、まさに長い物は巻かれろを具現化した様なこの男は、MSという強力な兵器を持っているこの自分に対して酷く媚びへつらっていた。

他の一軍の奴らも、まるで腫れ物を触る様な扱いで接して来る。

(なんだかなあ・・・)

マサキはイマイチパツとしない気分で食堂へ向かう。



「でよお！参番組の奴らがよお！」

「おっと、パイロット様のお出ましだ」

食堂ではハエダとササイがゲラゲラ笑いながら飯を食っていた。

また今回も目の届かない所で参番組の奴らに暴力を振るっていたらしい、弾は前から飛んで来るとは限らんというのに・・・

そう思いながらご飯を食べる、自分はサラダや肉料理を食べてるが参番組はよくわからない豆の入ったスープ一杯だけを食っているらしい、こうして普通に食っているのが彼らに申し訳なくなってきた。

◆◆◆数ヶ月後◆◆◆

「おやっさん！見たかい？さっきのお嬢さん！凄い美人だねえ！」

「マサキ、おめえ鼻の下伸びてんぞ」

「へへへ・・・」

丁度今日、我々CGSが地球に送り届ける予定のクーデリア・藍那・バースタインがやって来た。

初めて見る可憐なお嬢様を前に参番組のメンツは、どこかフワフワした気持ちでいる、マサキとて例外ではなかった。

そして遂にあの日がやって来たのだ・・・

その日マサキは夜の見回りの為、休憩室で仮眠を取っていた。すると・・・

ドゴオオ!!!

「なんだ!!今のは！」

突然の爆発音にマサキは飛び起き、外に飛び出す。

するともうもうと煙を上げて燃えている監視塔が見えた。

「敵だ!!」

サイレンが鳴り響くCGS内をマサキは走る。

◆◆◆

走っているとMWの用意をしていた参番組を見つけた。

「オルガ！ビスケット！」

「マサキさん！」

「襲撃してきたのは誰だ？敵の数は？」

「襲撃してきたのはまだわかりません、

敵の数はざっと20〜30機ぐらいはいます！」

「俺もザクで出る！少しの間だけで良いから足止めしてくれ！直ぐに向かう！」

「おう！」

マサキは急いでザクの所まで向かった。

◆◆◆

急いでザクに乗り込み起動させる、

液晶には「MS-06 ZAKUⅡ」とだけ表示され、その後に表示される細々とした

情報が表示される。

「マサキさん！たった今敵がわかった！敵はギャラルホルンだ！」

「ギャラルホルン・・・ギャラルホルン?!」

ギャラルホルンって確かこの世界を支配してる連邦軍みたいな奴らのことだよな

「マジか！」

「一軍は回り込んで挟み込むみたいだけど・・・あまり信用しない方が・・・」

「ああ、わかった」

碌に訓練も受けてないような奴らだ、

基地内の金目の物を持って逃げるだろう。

「・・・それと、ウチの動力炉以外のエイハブウェーブが観測されてる、相手がギャラルホルンだとしたらモビルスーツがあるかもしれない、

だから気をつけて」

「うむ！ モビルスーツの一機や二機叩き潰してやるよ！」

マサキはそう叫ぶと、ペダルを思いつきり踏んだ。

「よし、マサキ・サヤマー！出る!!」

周りを覆いかぶさっていた天幕をぶち破りザクが現れた。

◆◆◆

その頃

ギャラルホルンのMWと参番組のMWとの戦闘が始まっていた。

「うわー!!」

「イツテエー!!」

「死ぬうー!!!」

「三班！応援がもうすぐ到着する！耐えてくれ！」

「足がー!!」

「5班突っ込み甘い!! 当たり負けるぞ！ ユージン！移動!!」

「移動は良いけどよ!!このままじゃジリ貧だぞ!!!」

敵MWは三日月と昭弘の活躍によって何とか押さえられていた。

◆◆◆

「こんぐらいの弾幕なんてオデッサに比べれば!!なんて事は無い!!」

マサキのザクの盾には濃緑色のに映える黄色の星が3つ輝いている。
すると、ビスケットから無線が入る。

「マサキさん！ 悪い方の読みが当たった！一軍は社長と一緒に裏口から戦闘域から離脱中!!」

「だああ?!何だと！敵前逃亡だ!!」

クソが！ 今すぐそちらに向かう！それまで耐えていてくれ!!」



ギャラルホルンのMW兵は敵の予想以上の反撃により、苦戦を強いられていた。

「3番機がやられた!!」

「くそ、あの白いMWは何だ!!」

「4番機!水色の奴が来るぞ!!」

「MS隊はまだ来ないのか!!」

そうこうしていると敵の後方からMSらしき影が見えた。

「後ろから来た!挟撃か!!」

「よし、各機体勢を・・・っ!!」

MSが銃を構えたと思った途端に此方側に撃ってきた、突然の事に混乱に陥るGHのMW隊。

「馬鹿野郎!コッチは味方だ!!」

1人のGH兵がMWから身を乗り出し、外の様子を確認する。

「・・・グレイズじゃない!!」

其処にいたのは角張ったグレイズとは似ても似つかぬ丸っこいMS。

「死にさらせえー!!」

マサキはブースターを目一杯蒸し、MWに飛びかかる。

「うっ!うわあああ!!」

ザクはMWを難なく踏み潰し、周りに展開する敵MWに向けてザクマシンガンを乱射する。



「スゲエ・・・」

手強かった相手があんなにも簡単に蹂躪される様を見てユージン

が声を上げる。

「さあて！反撃開始と行こうか!!」

オルガ達は体勢を立て直し、総崩れとなったMW隊に攻勢をかけようとしたその瞬間。

ドオオン!!!

オルガ達のMW隊の近くで何処からか放たれた弾が着弾する。

「?! 大砲！ 一体何処から!」

◆◆◆

「!、この反応は！ うおっ?!」

ザクを通り越してオルガ達のMW隊の付近に着弾する。

マサキは急いでレーダーを確認すると、

レーダーには3機のMSが迫って来ていることを表示していた。

「遂に虎の子がお出ましか」

マサキは久し振りのMS戦に思わず操縦桿を強く握りしめた。

敵の襲撃部隊を叩け！

「来やがった！」

マサキの目の前には3機のグレイズが現れる。

「・・・ここにMSがあるなんて情報は無かったのに・・・！」

「だが向こうは1機、此方は3機！数においては此方が優勢！奴は私
が仕留める、克蘭ク、アインは支援しろ！」

「オーリス！迂闊な真似はよせ！」

「黙ってて貰おう、指揮官は私だ！」

克蘭クはグレイズ3機で囲みながら接近して攻撃する方法を進
言するも、隊長のオーリスは自分一人で格闘戦を挑むと言って聞か
なかった。

「これでも！喰らええ!!」

バトルアックスを構えたオーリス機は、バーニア全開でザクに向か
う。

「正面からくるか！」

マサキは前方のMSに向けて、マシンガンをぶち込んだ。

◆◆◆

タタタタ!! タタタタタタ!

撃ち出された弾は全てグレイズに当たるが、被害を与えられている
様子が無い。

「嘘だろ?!MS用弾だぞ?!」

「フウーハアハアハアハア!!!」

なおもグレイズは斧を構え、此方に接近してくる

「チッー。　じゃあこいつでどうだ!!」

マサキはザクマシンガンを投げ捨て、
ヒートホークを構える。

「フウハハハハ!!これでも喰らええ!!」

オーリスはバトルアックスを振り上げ、ザクに飛びかかった。

「り”やああああー!!!」

「何?!!」

振り下ろされたバトルアックスをヒートホークで真ん中をバツサ
リと斬り落とす。

そのままヒートホークを振り下ろすと

シオルダータツクルの構えを取る、そしてバーニアを吹かし体当た
りをかました。

ザクは凡そ60t、一方グレイズは30t

それらがお互い全速力でぶつかっただらどうなるだろうか？

「うーうあつ!!　コックピットが!!」

正面モニターが割れ、ひしゃげた操縦部がオーリスの脚を挟み、腹
部を圧迫する。

「・・・ガハッ！　クソ、　クランク！　アイン！　助けてくれ!!」

「アイン！　お前はそっちから奴を押さえ込め！」

「はっ！　はい！」

グレイズの上に馬乗りになっているザクに、クランクはバトルアックスを構えて接近しようとするが・・・

「往生際が悪い!!」

マサキはヒートホークを再び構え、コックピット部分に押し当てる。

「オッ！オーリス隊長!!」

アインの悲痛な叫びが響く。

ナノラミネートアーマーのお陰なのか、派手に火花がバチバチとなっていたが暫くしてヒートホークはコックピットを貫いた。

「な・・・！オーリス!!」

クランクは絶句し、アインは・・・

「ぎ・・・貴様ああ!!!」

よくも隊長をおおお!!!」

アインは逆上してしまい、後先考えずにザクに突っ込んでいく。

「待て！アイン！」

クランクの制止も最早彼の耳には届いてなかった。

◆◆◆◆◆

「もう来やがったか！」

マサキは再度ヒートホークを構えていると・・・

近くの地面に埋まっていた格納庫のハッチから砂塵を巻き上げて、1機のMSが飛び出して来た。

「アイン！退がれ!!」

「うわっ!!」

飛び出してきたバルバトスはメイスでアインを殴ろうとしたが、間一髪のところまで避けられてしまう。

「マサキ、おまたせ」

「うい！　それじゃあ行きますか！」

◆◆◆◆

「不味いな、2対2になってしまった」

クラランクが渋い表情でモニターを見る。

「アイン！　ここは一旦引くぞ、撤退するMW隊を援護しろ！」

「分かりました！」

アイン達は後退していくが・・・

「・・・逃すか！」

バルバトスはスラスターを吹かして

アインに向かう。

「くそっ！このヤロツ!!」

アインはバルバトスに向けてライフルを撃つも、滑らかな動きでバルバトスは弾をかわす。

「なんとという反応速度だ・・・！」

アインはバトルアックスに持ち替え、白兵戦に挑むも、バルバトスのメイスにより手首ごと壊されてしまう。

「アイン！　　うお!!」

クランクのグレイズが強い衝撃で揺れる。

「どこを見る?! お前の相手は俺だ!」

前方にはMSが斧を構えてこちらに向かってきているが、何故かバーニアを使わずに足を使って歩いてきているため遅い。

「くっ!!」

アックスを構え、クランクはバルバトスを襲う。

「あっ! 待てコラ!」

そうしている間にもクランクのグレイズはバーニアを吹かし、バルバトスに迫っていった。

◆◆◆◆◆

「これでアイツの武器を……!」

バルバトスがグレイズの、バトルアックスを手首ごとぶち壊した時に巻き上がった粉塵に紛れて、クランクのグレイズが

突撃し体当たりをぶちかました。

《どこから持ってきたが知らんが、ヘンテコリンなMSと旧型のMSでこのギャラルホルンのグレイズの相手が出来るとでも!?!》

グレイズとバルバトスの鏝迫り合いにより接触回線となり、お互いの通信が筒抜けとなる。

《でも、そのヘンテコリンな奴に一人殺されたみたいだけど?》

ミカがそう喋った瞬間、クランクの顔が強張る。

《そっ! その声……貴様、もしかして……子供か……?》

《そうだよ……、あんたらが殺しまくったのも……》

そう言うと、バルバトスは踏ん張りグレイズを押ししていく。

《なっ！押し負ける!!》
《これから あんたを殺すのも・・・!!》

◆◆◆◆◆

その頃 マサキは・・・

「待つてろー三日月ーすぐいくぞー!!」

先ほどの戦闘で投げたマシンガンを回収して、三日月の元へ向かっていた。

◆◆◆◆◆

更にグレイズを押し、バルバトスに倒されそうになる。

その時であった。

《クランク二尉!!》

バルバトスのコンソールから警報が鳴ると同時に、三日月はクランクのグレイズから勢いよく離れた、それと同時にバルバトスの目の前に弾が飛んでいく。

その後もアインは撃ち続けるも、その全てを躲される。

《くっそ!!!》

《なんていう反応速度だ!!》

バルバトスは背を下にして飛んでいたが、突然スラスタの調子がおかしくなった。

「スラスタが・・・燃料は、切れてる」

バルバトスのモニターにはスラスタの燃料切れを告げる警告が出ている。

そんな時

《三日月ー!!大丈夫かー!》

やっとマサキが戦場に到着した。

《!!クランク二尉!3時方向から丸い奴がきます!》

《くそ!来たか!》

(厄介な奴が増えた) クランクはそう思った。

「うおおおおお!!死ねえええ!!」

ザクマシンガンから対MS用弾が放たれる。

《来るぞー!》

《ぐお!!!》

アイン機に襲いかかった弾は先ほどの戦いで、ラミネートアーマーが削れたグレイズにダメージを与える。

すると、アインが怯んだ瞬間に三日月が

姿勢を最大まで低くし、アイン機の下に滑り込むようにして迫り、メイスでグレイズの顎をついた。

頭が吹き飛んだグレイズを見てクランクは即座に撤退を判断する。

そう判断するや否や、スラスターを全開にしてアイン機を抱きかかえるようにして全速力で戦域を離脱する。

マサキは滑るように逃げていく二機を見ながら深追いする事もないと、それを眺めていた。

《いつちまったな》

《・・・だ・・・》

《ん?どした?》

《まだだ・・・》

《おい? 深追いは・・・》

《まだっ・・・ぐっ・・・》

そこで三日月は鼻血を出して気絶してしまった。

CGS乗っ取り大作戦

ギヤラルホルン火星軌道基地

アーレス

「指揮官であるオーリス・ステンジャが死亡、三割の兵とグレイズ一機を失い止むを得ず撤退を・・・」

「そうか、御苦労だった」

コーラルは予想しなかった被害にいささか驚いてはいたが、かといって激昂する訳でもなく報告を淡々と聞いていた。

「しかし、ガンダムフレームがあんなところにあつたとはな・・・」

コーラル・コンラッド

今でこそノブリス等の商人から賄賂ズブズブで正に汚れたギヤラルホルンの象徴とも言えるような人物だが、伊達に叩き上げで火星支部の支部長になっておらず、かつて厄祭戦の事について書かれている書物を穴が開くほど読んでいた。

「・・・支部長、そのガンダムフレームに乗っていたのは・・・子供でした」

「厄祭戦の頃は兎も角、いま圏外圏で施術している阿頼耶識は子供にしか定着しないからな、ガンダムに子供を乗せるのも納得がいく・・・それよりもクランク、この緑色のMSは何だ？」

コーラルはタブレットに映る謎のMSの画像を見た。

「それが調べてみました、どのデータにも一致しませんでした。」

「民兵組織が独自に作ったとは考えにくいな、ギヤラルホルン以外でMSを作れるのはティワズぐらいなものだが・・・」

コーラル、クランク共に頭を捻るが、それらしい答えは出て来なかった。

「兎も角、襲撃作戦を再度計画を一から練り直す必要が出て来た。

次の指揮はクランク、お前にやって貰う」

それを聞き、クランクは顔を強張らせる。

「なっ！先程言ったではないですか！

子供が戦っているのです。私が指揮すれば部下に子供を殺す様に命令することになります、それは出来ません」

クランクは迷いなく言い放つ。

「クランク、貴様はギャラルホルンに入って死ぬ事など無いと思った事はあるか？」

「そんなことはありません、軍人である以上 死と隣り合わせですから」

「彼等も民兵組織にいる以上その気持ちではないか？」

「.....」

「わかったなら戻れ、命令は直に出す」

そう言っただけで通信モニターが切られた。

◆◆◆

火星

CGS

逃げた1軍の内、ハエダらが帰ってきた。社長であるマルバはそのまま逃走し、現在ハエダらが暫定的にCGSのトップとなっていた。

オルガ達は、MW駐車場に集まってこれからの事を話していた。

「俺たちがCGSを?!」

「お前も前に言っただろうが、ユージン。此処に乗っ取ってやるつてよ。」

「そんな事は言っただけだよ！この状況でか?!参番組の奴らだって何人も死んでる」

「この状況だからだ、今トップにある1軍がこの会社をマトモに回せ

ると思うか？このままじゃ奴らは確実に危険なヤマに手を出す。そうなりや俺らは確実に殺されるぞ。」

「かと言つて、此処を出るにしても仕事なんてないし・・・」

ビスケットが悩んだ様子で言う。

彼の家は農場を営んでいるが、育てているバイオエタノール燃料用のデントコーンは二束三文で買い叩かれ、ビスケットの仕送りでなんとかなっているのが現状だ。

とてもでは無いがビスケットが農場で働いた所で事態は好転しない。

「選択肢はねえって事か・・・と、マサキについては何か考えがあるのか？」

「ああ、あのMSか・・・」

マサキは確かに会社の書類上では1軍となっている。

しかし、いつも訓練以外の時も参番組の所にいたり、先日の襲撃の時も自ら出撃して参番組を守った。

オルガはマサキが1軍側に付く可能性は限りなくゼロに近いと考えている。

が、もし1軍の味方についてた場合とても厄介な事になる。

「あ、いたいた」

そんな時タイミングよくマサキが現れる。

「今外の片付けが終わったんだけど・・・、どうした？揃いも揃って怖い顔して？」

「い、いやあ、何でもないですよ」

そうは言うが、昔見た暁の蜂起の写真の士官学校生の目つきにそっくりだ。

「・・・ハハアーン、クーデターでも起こす気か？」

マサキは半ば冗談めいた口調で聞くと、どうやら凶星だったようで、皆の目が泳ぎ始める。

「・・・マジ？」

「マサキは1軍の奴らの事・・・どう思ってるんだ？」

オルガはマサキの目を見て問う。

(ヤバイ、返答次第では死ぬ奴だ)

しかし、オデッサの撤退戦を経験したマサキにとって、それぐらいでは冷静さを欠くことは無かった。

「1軍には思う所はある。

というか、実はこれからアイツらをどうにかしてやろうと考えていた」

そういうと、マサキはピストルを見せる。

敵前逃亡は銃殺刑あるのみだ。

◆◆◆

現在オルガ達は眠った1軍のいる倉庫の前にいる。

「そろそろ起きる頃だろ。よし、いくぞ。」

ピストルを持つ三日月とオルガ達は部屋に入る。

◆

「ん、ああ？なんなんだコレは？」

ハエダが目覚めると自分は手足を拘束され、床に寝ていた。

他の1軍の奴等も似たような感じだ。

自分はいさつきまでベットの上で飯を食っていたはず、なのに何故・・・？

困惑しっぱなしの1軍であったが、その時入口のドアが開いた。

「おはようございます、薬入りの飯の味は如何でしたか？」

其処には参番隊のガキどもと、マサキが立っていた。

「薬だあ?!」

「ガキどもなんの真似だ!?それにマサキ! テメエもなんで其処にいやるー!」

「はつきりさせたいんすよ、こここの1番が誰なのかをね。」

「それに、あんたら逃げたよな、仲間置いて、敵前逃亡したらどうなる

か知ってるか？」

マサキはそう言うと、拳銃を取り出してハエダに向けて引き金を引く。

パン

「ガアツ!!肩が!」

マサキはハエダの肩に向けて撃った、

そしてマサキはハエダの眉間に拳銃を押し付ける。

「ここから出て行くか?それともここで死ぬか。」

「わわわわわかった、わかった!だから銃を下ろせ!」

ハエダの股間が僅かに濡れているのを見ると、参番組の方から笑い声が聞こえる。

「・・・くそッ!」

マサキは銃を上げて、オルガにこれから1軍はどうなってもらおうか説明してもらおうとしたその時であった。

「コイツウ!!」

ササイがいきなり立ち上がりマサキに体当たりをかました・・・が、手を縛られて立ち上がりにくい体制から立ち上がったばかりの奴の体当たりなどたかが知れている。

うつちやりをかまして倒れた所に、銃弾を3発おみまいする。

「と、言う事で、これからCGSは俺たちの物になる。

さあ選べ、俺たち宇宙ネズミの下で働くか、それとも此処から出て行くか?

嫌ならコイツみたいになってもいいぞ」

そう言いオルガは部屋の隅でゴミの様に丸まっているササイの亡骸を踏みつける。

皆が黙りこんでいる時、1人1軍の方で声をあげた人がいた。

「あのお・・・俺は、出て行く方で・・・」

眼鏡をかけた気弱そうな男がCGSから出て行くか旨を告げるが・・・、その男に対しビスケットはこう告げる。

「あ、確かあなたは会計を担当している

デクスター・キュラスターさんですね。貴方には残って貰います」

「ひええええええええええええッ！」

余りにも情けない叫び声が火星の大地に響き渡った。

グレイズ1機確認

「さあさあー片付けた！片付けた！」

1軍だった野郎供が、持てるだけの荷物を持ち出て行く準備をしていた。

ゾロゾロと荷物を持って出て行く中、マサキは部屋の中で寝ているトドの元に向かう。

「よお、トド。」

「お、おう、どうしたんだ？」

「どうせお前も出て行くんだろ？荷物少なくしてやるよ。そう言う訳で酒くれ。」

「へっ！何でそうなるんだ、俺は残る事にしたぜ」

「何だ意外」

「そう言いながら酒をくすねそこねたのを悔しがった。」

◆◆◆◆◆

「コイツはどうしたもんかな・・・」

雪之丞はザクを見上げ、悩んでいた。

このMSは兎に角分からない事が多すぎる。

今は機内にあつた整備マニユアルを見て最低限の出来る事はしているが、本格的な整備となると完全にお手上げだ。

「しかも小型核融合炉だ、流体パルスだ。訳分からん単語ばかりで頭がいてえ」

とにかくネジは共通規格だったのは幸いだった。

マサキは一部の装甲を外して火星の赤い砂を掃き出していた。

ザクは地上戦では流体パルスのパイプが外れようが水に浸かろうが、割と平気で動いていた為、多少乱暴に扱っても大丈夫なのだろう。

それよりもマサキが気になったのは戦利品で取ったグレイズのマシンガンにバトルアックスだ。

マシンガンは、先程の戦いでMSには全く意味が無かったのが分かった為、バトルアックスを多用する事に決めた。

ヒートホークも消耗品なのであまり使いたくなかったのだ。

「……とまあこんなもんだろ」

掃除を終えたマサキは機体から降りる。

その時だった。

基地全体にスピーカーから監視班の報告が響く。

『監視班から報告！ギャラルホルンのモビルスーツが1機、えー…赤い布を持ってこっちに向かっている！』

向こうの方から赤い布を肩に掛けたグレイズが1機、こちらに向かっていった。

「何なんすか、あれ」

「ありや決闘の合図だな」

「決闘?!」

『私はギャラルホルン実働部隊所属、クランク・ゼント！そちらの代表との1対1の勝負を望む！』

「へえ、このご時世に決闘ね、騎士道精神って奴か」

「厄祭戦の前は大概のもめごとは決闘で白黒つけてたらしいが、まさか本気でやってくるやつがいたとはな…」

『私が勝利したなら、そちらに鹵獲されたグレイズと、そしてクーデリア・藍那・バーンスタインの身柄を引き渡してもらおう！。勝負がつきグレイズとクーデリアの引渡しが無事済めば、そこから先はすべて私が預かる。ギャラルホルンとCGSの因縁は、この場で断ち切ると約束しよう！』

「?、此方が勝ったらどうするんだ?」

「さあな、向こうが勝ったら勝ったで本当に因縁を断ち切れんのか?」

「実働部隊隊長つてんだから、少尉中尉つて所でしょ。現場指揮官が上層部の事に口出し出来んのかな?」

(少尉?中尉?)

雪之丞は聴きなれぬ単語に疑問を抱く。

「朝駆けしといて何言っただか。

なんかもうあやふやだな、直接聞くか」

既に下にはクーデリアやオルガ達がおおり、どうなるか見守っている。

監視塔が上がったマサキは、監視員からマイクを奪い、クランクとか言う男に話しかける。

『えー、あー、そちら側が決闘したいと言うことは分かった、だが此方が勝った場合どうするのか？それが知りたい』

暫しの沈黙

『・・・わかった、俺の命、そしてこのMSをそちらに渡そう。』

まあ、充分納得のいく条件だろう。

『よし、その条件でいいだろう』

そしてマサキは外にいるオルガに向けて叫ぶ。

「オルガー！この勝負自分が出ていいかー！ー！」

「！」

「ミカ、マサキに任せちまっても良いか？」

「ん？俺は別に良いよ」

「わかった、それじゃマサキ！頼んだ！」

「おう！」

◆◆◆◆◆

今荒野では2機のMSが対峙していた。

肩に赤い布を纏った四角いモビルスーツ
もう一方は、

一切情報の無い未知の丸いモビルスーツ

『ギャラルホルン火星支部実働部隊！クラランク・ゼント！』

『え、ああ、ジオン公国宇宙攻撃軍ソロモン防衛隊 サヤマ・マサキ！』
お互いバトルアックスを構え、スラスターに火が入る。

『参る！』

『ザク発進！』

両機一斉に飛び出し、バトルアックスどうしがぶつかり火花を散らす。

『どおりや!!』

ザクは数回斧を叩きつけるが、それをグレイズは盾でいなす。

そしてまた数回斧どうしでの打ち合いが行われた後、ザクが隙をつきグレイズの

両腕を掴み動きを封じる。

『このザクに取り押さえられては手も足も出まいてえ!!』

押さえ込まれている間もグレイズは足とスラスターを使い、ザクのバランスを崩そうと仕掛けて来る。

『この声、あの時の白いMSの子供では無い、貴様大人か?!』

『あ?ああ!ピッチピチの23だが?!』

『ならば問おう！何故あのような少年を！このような危険な戦場で戦わすのだ!？』

クランクの問いは、地球で普通に学校に通い、人並みの家庭で育った人ならば当然とも言えるものであった。

コロニーの中流家庭で生まれ育ったマサキも、ここに来たばかりの時は同じ疑問を抱いたものだ。

『俺が無理矢理戦わせてんじゃない！』

ああでもないしと仕事が無い！生きてけないんだとよ!』

そう叫ぶと、ザクは右手を放すと握り拳で胴体を殴り付ける。

『何だど?・・・、づっつ!!』

凄まじい衝撃がグレイズのコックピットに伝わり、クランクは激しく揺さぶられる。

『ぬうー!』

そして足を払われ盛大に地面に叩きつけられるグレイズ、衝撃で赤い砂がモウモウと舞う。

その時グレイズの斧が吹き飛び、観戦していたオルガ達の側に落ちこちてきた。

『うわあ!!』

『ひえくえー!』

周りの少年兵達は叫び驚くが、オルガは全く動じずに真っ直ぐ前を見つめ、こう呟いた。

「鉄華団」

当然出て来た言葉にクーデリアは反応する。

「え?」

「俺たちの新しい名前・・・CGSなんてカビ臭い名前を名乗るのは癪に障るからな」

「テツカ・・・鉄のヒですか?」

「いや、鉄のハナだ。決して散らない鉄の華」

それを聞いた三日月も。

「鉄華団、いいね、それ」

「だろ？」

オルガは得意げに片目を閉じた。

「ところでさ、オルガ」

「何だ？」

「勝負ついたらんじや無いかな？」

「おお、そうかもな」

目線の先にはザクの足元で、ピクリともしないグレイズが横たわっていた。

◆◆◆

ザクはグレイズの頭に手を引っ掛けて、鉄華団基地へと向かっていった。

歓声と共に迎えられたザクは、手をgoodにして応える。

そしてグレイズが動けない様にし、もしもに備えて銃を構えて外の緊急脱出用の外部操作盤を弄りコックピットハッチを開く。

そこには、白目にひん剥いて泡を吹いているクランクの姿だった。

「あははははーぎさまあねえぜ！」

「いい気味だ!!」

団員はその無様な姿に爆笑する。

「さあ、こいつを救護室に連れて行くから手伝ってくれ」

そう言いながらマサキはダクトテープでクランクの両手両足をグルグル巻きにした。

宙へ

クランク・ゼントが目を覚ますと、薄汚れた天井が広がっていた。

「……んこは」

ベッドから上半身を起こし……

起こそうとしたが、体がバンドで固定されていた。

「うぬっ……動けん」

しかし、CGSに決闘を挑み捕まったのであれば、いつ起きて暴れるかも分からない捕虜を縛っておくのは、必ずしも間違っではないだろう。

だからと言ってこのまま縛られているのも気分が悪い。

「すまないが、だれかいらないのか？」

クランクは人を呼んでみた、縛られているとはいえ、手当がされているようだったから酷いようにはされないだろうと踏んでの事だった。

◆◆◆◆◆

その後やってきたマサキと名乗る青年により尋問が行われた。

なぜ襲って来たか、その理由をあらかじめ聞いた後の事であった。

「……しかし、さつきは縛ってしまっして申し訳ありませんでした。

本来なら南極条約違反になってしまおうのですが、今回ばかりはしようがないことでした。」

「……すまないが、先ほどのジオンといい、南極条約といい……。一体何なんだ？」

そのことを聞かれ、マサキは一瞬迷ったがオルガ達に話したのと同じ内容を話した。

◆◆◆◆◆

「……そんな信じられない話があるのか……？」

やはりこんな反応だ、別世界から来たとか言う奴がいたら自分は、基地外だと決めつけるだろう。

しかし現にザクという証拠があるのだ。

「……ともかく、決闘前に貴方に言ったことを覚えてますね？」

「あ、ああ。私のグレイズと、私の命。だったな。」

「そう、そして貴方に頼みたい事があります。」

「??」

「これから自分らは仕事で宇宙に行く、火星の本部には小さい奴らが残っている。そいつらに勉強を教えてくださいませんか?」

マサキは克蘭クの目を見る。

「・・・正気なのか・・・?つい先日まで敵だった者に頼むなど・・・」

「貴方も戦っていた時言ってたでしょう、何故戦わせるのかって。あいつらは文字が読めないんです」

「!」

「字が読めないからまともな職に就けない、だから機械を埋め込んだり、銃を持って戦う仕事しかない。そんな世界なんです火星は」

「・・・」

しばしの沈黙

「解った、私が覚えている事の全てを教えよう・・・」

それが殺してしまった少年達の罪滅ぼしになるのなら・・・。

◆◆◆

ギヤラルホルン火星軌道基地

アーレス

「克蘭クめ・・・、勝手に行動しおつてからに・・・」

出撃の様子を見たものが言うには、赤い布を持っていたというから、CGSに決闘しにでも行ったのだろう。

あいつは昔からそうだやる事がいちいち古臭いんだ!

「新江、ファリド特務三佐が着くのは何時だ?」

「はっ、二日後には」

(もう間に合わないな、仕方ないがノブリスの資金援助の件は無しだ)
「解った、それと地上MS隊には待機命令を出しておけ」

「はっ」

◆◆◆

「・・・と、言うわけでクーデリア暗殺は、都合が悪くなり出来なくなつた」

「ちよつと待て！こっちはクーデリアの暗殺の為に金を積んだんだぞ
!？」

「では、電話切りますよ」

向こうで何やら騒いでいるが知らん。

さて、監察官サマの用意をしなくてはならないな。

「ノブリスに関する通信データの一切を削除しろ」

◇◆◇

CGS

既にCGSのマークには白い？マークで塗りつぶされていた。

あんなでっかい刷毛何処にあったの？

そんな疑問を他所に、シノが少年兵達を鍛えていた。

そのそばでトドが頭を抱えていた。

「はあく・・・、餓鬼どもが・・・ギヤラルホルン喧嘩売って無事で済む
わけねえだろ・・・馬鹿だ！大馬鹿だ!!このままじゃ身の破滅だぜ。ぐ
ぐぐ・・・」

トドがこれからの事について悩んでいた時、マサキは呑気にザクの
整備をしていた。

赤い大地 漆黒の宙

アーレス

そこではガエリオとマクギリスが、火星支部のデータを調べていた。

もつとも真面目に仕事をしているのはマクギリスで、ガエリオはただ紅茶を飲んでいただけだが。

◆◆◆

「お前のペースで働いてたら体が持たないだろうな。部下達も死にそうな顔をしていたぞ」

「そうか」

「無能なのは以ての外だが、優秀過ぎても問題というやつだな」

「今後は気を付けよう」

「それでどうだ？コーラルが寄越してきた書類は？」

「これといった問題点はないな。まあ、下手に小細工されているよりはよっぽど良いが。・・・そうだ、1つ疑問に思った点がある」

「どれだ？」

マクギリスはタブレットに指を滑らせ、ある資料を見せる。

「これだ。一個中隊が出動しているが、

未だ帰投したという報告がない。」

「ほう、一個中隊がか」

「資料にはデモ鎮圧とあるが、それにしても帰投が遅すぎる」

「確かに」

「コーラルが何か隠しているのかも知れない、聴いてみる価値はありそうだ」

タイミングよくコーラルがやって来た。

「お、噂をすればなんとやらだな」

「コーラル本部長、このデモ鎮圧に出動した一個中隊がまだ帰投していないようですがどうされたんですか」

「その件だが、その中隊はクーデリア保護の為にCGSという民兵組

織に向かわせていた」

「クーデリアというと、クリュセの代表首相の？」

「確か、その娘さんは独立運動にお熱だったよな」

「我々の情報筋から火星ハーフメタルの貿易自由化の為、地球に出発するとの情報を得た。」

「その為捕獲する為に向かったと。」

しかしデモ鎮圧などと偽って向かったのは頂けないな」

「事態は急を要すると判断し、デモ鎮圧という名目で出動させた次第だ。申し訳ない」

「ほう」

「万が一にもクーデリアの計画が成功してしまえば、火星におけるバランスが崩れ治安が悪化してしまう恐れがあると考えたのだ」

「しかし、部隊が帰投してないのとは関係が無いのでは？」

「その事だが…、そのクーデリアのいた民兵組織に2機のモビルスーツが確認されたそうだ」

「なんだと…」

「モビルスーツ?!」

「ああ、しかも僅かな生き残りが持ち帰って来た映像から、そのうちの一体はガンダムタイプだったらしい」

「!……ガンダム……」

「なんで厄祭戦の機体が…?」

厄祭戦。それは300年前に勃発した戦争であり、暴走したMAとの戦いであった。そのMAに対抗する為72機のMSが作られた。戦後、72機の殆どは撃墜や解体処分によって失われたが、一部資料によると26機ほどが何らかの形で残存しているとされた。

「しかも、もう一機は今までのデータベースに無い機体だった。」

「火星でMSを生産できる組織など確認出来ない筈では？」

「どうだろうな、テイワズが新たなMSを作ったのかも知れないし、宇宙に漂ってるMSを改造したのかもしれない」

そんな時、コーラルの携帯端末からコール音が鳴った。

「少し失礼する……うむ、分かった。引き続き監視を続ける様に」

「どうされました?」

「シャトル発射場でCGSの制服を着た人物を確認した、調べた所同組織所属の宇宙航行艦を操縦する為の人員らしい、それと先ほど言った情報筋によると明日、クーデリアを乗せて飛び立つと。」

「成る程、それで? コーラル司令は如何なさるので?」

「発射されたシャトルが合流される時にでも理由を付け取り押さえようと思っている、監査官殿はどうされるか?」

「司令は現場に行かれないのですか?」

「わざわざ司令官みずから赴く程の事でもあるまい」

「そうか、ならマクギリス、せつかくだから火星支部の働きぶりを見に行こうじゃないか」

◆◆◆◆◆

そんなこんなで我々鉄華団はシャトル発射場に来ています。

といっても生まれて今までコロニー育ちだった自分は発射台を使って空を飛ぶ経験など無きに等しく、あつてもオデッサから撤退する時の地獄の様な経験しかないため正直言つて乗りたく無い。

やっと宇宙に逃れることが出来ると思つた矢先のボールの編隊に襲われた時の絶望感。わかる?

◆◆

シャトルの発射時間が間近に迫つて来ている、みなシートベルトを閉めて発射の衝撃に備える。

発射開始と共に座席に強く押しつけられる感覚を味わうものそれも数秒で終わり、あつという間に火星の軌道に乗る。

眼下には緑の生い茂った火星が広がり、これからの旅の始まりも相まって感慨深い気持ちになるマサキなのであった。

ヤバいことなら銭になる

火星低軌道上

シャトルは無事低軌道に乗り、あとは低軌道ステーションに入港後オルクス商会の船を待つだけとなった。

やはり宇宙とはいいいいものだ、スペースノイドのホームグラウンド。

「オルクス商会か、ちゃんとしたところなんだろうね？」

末法めいたこの世界、その世界の統治組織であるギャラルホルンに追われている身としては、GF管理下の正規ルートで地球に行けるはずもなく必然的に裏ルートを通る事となる。

勿論非正規の裏ルートを通るのだからその案内人もヤクザの様な人間に違いない、下手すれば騙されて着の身着のまま宇宙に放り出されるのではないかとマサキは不安だった。

「だから言っただろ？安心と信頼のオルクス商会だつて！」

「まあ命取らないならいいけどさ」



「あつーあれがオルクスの船じゃないですか！」

タカキが窓を指差し外の宇宙船を見る。

「予定より少し早いな・・・」

そんなオルガの呟きの直後であった。

その宇宙船から三つほどの何かが出て来た。

それはマサキにとつてあまりにも見慣れたMSのバーニアであった。

「・・・MSだ！お出迎えかな？」

「いや！違うGFのモビルスーツだ！」

「奥にもなんかいるぞ！」

「奥のもGFか?!」

「なんでGFがいるのさー！」

オルクスの船の奥に2隻程のGFの軍艦がお目見えしている事に

驚きを隠せぬ一同。

「説明しろ！トド！」

「そんなもん俺が知るか！GFなんて聞いてねえぞ！」

と言うや否やコクピットに駆け込み、オルクスとの連絡を取った。すると帰って来た返事は。

『我々への協力に感謝する』

◆◆

「トド！この野郎てめえ裏切りやがったな！」

ユージンやシノ、マサキにタコ殴りにされるトド。

そうこうしているうちにグレイズ3機にシャトルが囲まれてしま
うも、荷台から三日月の乗るバルバトスが出撃し窮地を脱する。

追加のグレイズから逃げ回り、オルクスの砲撃からも逃げ回って
いた時、静止軌道から昭弘の乗ったイサリビが降りて来た。

「迎えに来たぜ、大将」

◆◆

我々は急いでシャトルからイサリビへ移る、トドを4の地固めにし
ているマサキはシノに牽引される。

オルガ達は艦橋に移り指揮を取る。

そこにトドが流れ込んきて

「なんでイサリビがここにいんだよ?!

静止軌道にいるんじゃないのか?!

「お前が信用にたる仕事をした事があつたか?」

まさに一蹴。

その後トドは倉庫にぶち込まれる。

◆◆◆◆

「ヤマギイ！ザクの用意はいいか!!」

「はい！いつでも！」

『マサキ！取り敢えず今は周りのMSを潰す事だけに集中しろ！』

「OK！これよりマサキ！出ます！」

バーニア全開でイサリビから飛び出す。

丁度昭弘も三日月と合流していた。

『足の止まったのからやろう、援護頼む』

『な！待てよ三日月！俺はまだこれに慣れてねえのに！』

『昭弘！援護する！』

『ありがてえ！』

◆◆◆

一方その頃……。

「!! このリアクターの反応は！」

クランク二尉の仇を討つべく、鉄華団襲撃に向かったアインは、鉄華団の使用しているMSから自分が知っているエイハブリアクターの反応を感知していた。

「・・・オーリス隊長のグレイズ！」

◆◆

時を火星出発前に遡ろう。

先のGFの戦闘で二機のグレイズを鹵獲していた鉄華団は、新たな戦力確保の為に整備していた。

が。

「ダメだなこりゃ、リアクターが逝かれちゃってる。」

「直すにもかなりかかりますね・・・」

元クランク機はマサキが回収で引きずっている時にリアクターが破損していたのだ。

一方オーリス機はコックピットこそ潰したものの、リアクターそのものは無事だった。

その為、クランク機のコックピットをオーリス機に移し替え、その他をジャンクパーツとした。

◆◆◆

その為、いまアインの目の前には

あの白いMSに屠られたオーリス隊長機と言う反応がでたのだ。

「オーリス隊長の仇!!」

三日月は突っ込むアインをひらりとかわし、他のグレイズの攻撃を華麗に避けつつ撃破する。

「うへー、初手四機撃破か。エース級も夢じゃないな……って新手だ！」
自分達よりも上にこれまでのMSとは違う機体がこちらに向かって
いる。

「見てくれよりは出来るようだな！」

ガエリオ・ボードウインの駆けるシュヴァルベ・グレイズがガンダムバルバトスと今まさに刃を交えようとしていた。

◆◆◆

『昭弘！右から来るぞお！』

『おう！』

『頭狙え頭ア！』

『阿頼耶識がねえんだ！細かい操縦は出来ねえ！』

三日月が恐らくエースと思われるグレイズ2機と交戦している中、マサキと昭弘はペアを組んで雑魚グレイズと交戦していた。

「ほらよ！一丁上がり！」

グレイズのコックピットにバトルアックスを叩き込み蹴飛ばす。

『昭弘！マサキ！聞こえるか！』

『はい！』

『おう！』

『イサリビはこれより資源採掘小惑星を利用して回頭する！2人はGFとオルクスの船を出来る限り邪魔してくれ！』

『なんだと!?!』

『了解！昭弘はそこにいろ！』

『お！おい！待てよ！』

マサキは滑腔砲を手にオルクス商会の船へ向かっていく。

◆◆◆

「一体何をやる気だ！」

オルクスは鉄華団のとつた行動に驚きを隠せないでいた。しかし有利なのはこちら側、所詮ガキが足掻いた所で・・・と思っていた時であった!。

「?! 3時方向からMSがやって来ます!」

部下の報告に3時方向を見ると、既に目と鼻の先までMSが迫って来ていた。

「何をやっている!レーダーはよそ見していたのか?!」

「そつそれが、エイハブウエーブが確認出来ません!」

「何だと・・・うわあ!!」

最後まで言い切る途中で艦橋の前に一つ目のMSが姿を現した。

MSは滑腔砲を構え、艦橋に向け発射した。

艦橋が盛大に爆ぜ、パニックに陥った船は徐々に進路がブレていく。

『オルクス商会の艦橋を撃破!鉄華団を裏切った奴は痛い目をみるのだ!』

『やるじゃねえかマサキ!此方も回頭が成功した!マサキと昭弘を回収する!』

マサキはイサリビにしがみつき帰還を果たす、昭弘もこれに続く。その後無事三日月も回収された。



イサリビ

倉庫

「よお、二気力でやつとるか」

マサキは倉庫の隅で転がされてるトドの様子を見に来た。

「何だ?このオレを笑いに来たのか?」

「うん」

そう言いながらわざとらしく笑って見せるマサキ。

「んで、正直なところオルクスとどうしようとしてたんだ?」

「・・・オルクスと合流した後、グーデリアをとつ捕まえてGFに渡して、MSも売っぱらっちゃまおうと考えてたんだよ。」

「オルガ達はとうするつもりで？」

「それはく……」

歯切れ悪い返事の後、トドは拳銃を構えるジエスチャーをする。

「はあー、あんたこれ知られたらオルガ達に殺されるよ？」

「た！頼む、この事だけは！この事だけはあいつらに内緒にしてくれ！」

「うん、わかった、しかし条件がある。」

「な、何だよっ」

「お前はこれからどんな事があっても、鉄華団から抜ける事は許さない、これからも戦闘は起こりうる、どうせお前は進めど地獄戻っても地獄なんだ。それならば……いっぺん地獄の底まで行って見てみようじゃないか」

勇魚取り①

「コーラル司令、捕獲部隊がクーデリアを取り逃がしたと報告が入りました。」

「うむ、解った。部隊は速やかに帰投し指示があるまで待機せよと伝えておけ」

「はっ」

(奴らを取り逃がしたか・・・、しかし)

セブンスターズの倅どもの顔に泥を塗った以上逃してはくれないだろう。奴らに対して執拗に追いかけていくはずだ。

しかし次に会敵するとなると火星圏内となる可能性は遥かに低い、確実なのは地球降下時で管轄は地球外縁軌道統制統合艦隊。つまり我々火星支部はお役御免となる訳だ・・・)

「新江、諜報部隊に連絡して失踪した克蘭クを搜索する様に命じろ。」

「了解しました。」

「全く・・・手間をかせさせてくれる・・・」



トドはマサキに猿回しの様に繋がれながら、今回の件について弁明していた。

「つまり、今回のオルクスのは向こう側が勝手に情報をGFに売った訳であり、

トドはむしろ被害者であるというわけであってだ」

「そ、そうだ！オルクスの奴らが勝手に裏切ったんだ！酷いやつだろお！」

「本当なのかマサキ、まさかお前もトドに加担してるわけじゃねえよな？」

「そんなわけない、加担してたらあの時点でオルクスを攻撃する訳がない。」

「あ、ああ。それもそうか」

シノは納得する。

「兎に角だ。裏切るようだったらノーマルスーツ一丁でコイツを宇宙に放り出すつもりだからよ、安心しろ」

オルガは目を細めながらトドとマサキを交互に見る。

マサキは信用できるにしても、トドが不安だと思っているのだろう。

「わかった、マサキの事を信じる。トド、お前は当分倉庫番だ。」

「そうだぞ、しっかりと働けよトド！」

「へ、へい。団長・・・」

オルガとシノに対し、トドは弱々しく答えるのであった。

◆◆◆◆◆

トドを倉庫に押し込んだ後、マサキはビスケットにイサリビを案内してもらっていた。

「ここが医務室です。ここに包帯、消毒液があります。」

「了解了解・・・それで医師は何処に？」

「船医は・・・いません」

「え、じゃあ戦闘の時どうするんだい。」

「CGSの時は一軍の詳しい人がやってたんですが・・・、火星の戦闘で死んでしまった」

「医師不在かあ」

◆◆◆◆◆

ヴウー!!!ヴウー!!!

ビスケットの案内が終わった後、マサキはザクの補修作業をしていた。

「敵か?! 雪之丞さん!ちよつと艦橋にいつてくる!」

「おう! って、おい!工具投げんな!」

◆◆

「団長、どうしたって・・・っておうつ?!」

「やい！オレの船を乗っ取りやがって！

オルガ！オルガを出せ!!」

「マツ、マルバ社長?!?!?」

マサキが艦橋に来て真っ先に目に飛び込んできたのは、GF襲撃時に財産を持って真っ先に逃げたCGS社長。マルバ・アーケイであった。

勇魚取り②

狭いMSのコックピット内に若い女性の鼻歌が響く、彼女は足にネイルを施していた。

「それにしても・・・早く食べたいなーアレ。茹でたエビみたいですよー
ごい美味しそう！」

彼女の乗るMSのモニターの一部には下方から映し出されたイサリビがいた。

しかしイサリビを茹でエビみたいで美味しそうとは、なかなかユニークな発想だと思っただが・・・



一方実際にソロモンで照り焼きになったマサキはというと。

『人の船を勝手に乗り回しやがって!!この泥棒ネズミが!!』

誰かと思えば真つ先に敵前逃亡かましたシャチヨサンじゃあねえ
すか、今更どの面下げて通信してんだ。

取り合えずユージンに社長と全然成立してない会話に勤しんでも
らっている間にフミタンに何処から通信しているのか探ってもらっ
た。

「方位180度、距離6200。相対速度ほぼ一致してます。」

うん、間違いなく付けられてるね。

少なくともレーダーに探知されずに後をつけることが出来る技量の
持ち主ということ、ミノ粉も無しに良くやるもんだ。

すると画面が切り替わり、汚い社長から白スーツに長髪のオシヤン
ティー男が現れた。

彼の名前は名瀬・タービン。

タービンスという組織の代表で、彼曰く敵前逃亡社長とは仕事で付
き合いがあり久しぶりに火星に来た際に偶然再会。

GFと揉めていたので「俺ら」の力で手出しできないようにしてや
ると言ったらしい。

タービン・・・タービンス・・・名瀬・タービン・・・なんか聞き覚え
が・・・

「タービンスって言うのは木星圏のトップのテイワズ直参の組織で、名瀬はそのテイワズのトップであるマクマード・バリストンと親子の盃を交わしているらしい。」

オイオイオイヤクザだわこいつ。

で、GFを何とかする代わりにCGSの全てをタービンスで預かるという事で話がまとまったのだがご存じの通りCGSを潰して鉄華団となっている、がGFの戦闘を見ており実力は折り紙付き、資産を返上してくればタービンス傘下で真つ当な職を斡旋してくれるという。

これもう勝ち確じゃね？安全な職も住処も全部手に入れられるんだ。こいつはこれ以上ない俺達の上がりじゃねえのか？

名瀬さんは大所帯だから今後は鉄華団全員と一緒に居られるわけでは無いと言ったが、そんなもん予定を合わせて集まりを開けば済むことである。

「俺は皆がバラバラになるのは嫌だな」

いきなり何言ってるすか三日月イ!!!このままだと宇宙で皆が四肢がバラバラになって死ぬ可能性があるんだぞ!?

「悪いがタービンさん、その話には乗れねえ」

「オルガア!?!」

「俺達にはお嬢さんを地球まで送り届ける仕事がある、いま途中で投げ出す訳にはいかねえんだよ」

そんなん名瀬さんに任せりゃ良いじゃねえか!!

と思つたら、お嬢さんはマルバの資産扱いらしい。

オルガはフミタンに何か言いたげに目を向けるが、フミタンは黙つたままだった。

今度はビスケットがタービンにGFに気づかれないうちにクーデリアを送りたいのでGFに会わないような航路を案内してほしいと頼んだが・・

「火事場泥棒で組織を乗っ取ったガキがいつちよまえの口を利くなつ！俺はな、さつきから道理の話をしてるんだよ！」

「道理ってのは物事の正しいすじみち、人として行うべき正しい道という意味であって敵前逃亡した奴の肩を持つ奴が言う事かあ？」

「そうだ、俺らを見殺しにした腰抜け野郎とは取引しといて、それを言うか？」

「あんな野郎より下に見られてるってのは面白くねえ・・・！」

「じゃあお前らどうすんだ？ガキじゃねえってんなら、俺を敵に回す意味くらいわかってんだろうな？」

「・・・さつき言った通りだ。あんたの要求は飲めない、あんたの要求がどうだろうと、俺たちにも通さなきゃいけねえ筋がある」

「それは・・・俺たちとやり合うって意味でいいんだよな？」

「ああ・・・俺たちがただのガキじゃねえってことを教えてやるよ。マルバ！てめえにもな」

「お前ら、生意気の代償は高くつくぞ」



どうもマサキ・サヤマです。敵前逃亡社長を匿うヤクザに喧嘩吹っ掛けられたのでただいまハンガーに急行中です。

整備班を潜り抜け人蹴りでザクに乗り込み起動する。

「よおし、昭弘、マサキ、三日月の順で出るぞ！」

カタパルトにて射出される昭弘のグレイズ。続いてザクが射出される。そして最後にバルバトス。

「三日月、昭弘！敵は2機、なぜかは余り知らんがこのザクは敵のレーダーには映りにくい！自分はこれから敵艦に接近し艦橋及びエンジン部を叩き無力化する！」

「了解！」

「さあ・・・狩りの時間だ。ヤクザ共・・・」

勇魚取り③

3機のMSが出撃した後イサリビは後退してハンマーヘッドに追いつかれぬようにしていた。

しかし、進展しない現状に痺れを切らした名瀬が高機動型の百里の投入の指示を出した。

百里はさながらMA（この場合はザクレロやビグロ等のMAの事である）の様に一撃離脱でねちっこく攻撃を加えてくる。

「やべーぞ！対空砲じゃ埒が明かねえ！」

「アドモスさん！三日月達に連絡とってください！！このままじゃやられる!!」

◆◆◆◆◆

マサキはハンマーヘッドに近づいていた、しかし前回のオルクス商会の攻撃成功し慢心していたのだろう、スラスターを吹かしながら移動していたのだ。

これにいち早く気付いたのはアジーだった。

「・・・!!!姐さん、MSだ!」

「なんだって?!レーダに映ってないじゃないか!」

「ここは私がつ」

アジーの百鍊がザクに向かおうとするがグレイズ改に阻まれる。

「行かせねえぞ!!」

「くっ！ラフター！至急船を防衛に回るんだ！MSが来るよっ!!」

「ええっくっ!!」

◆◆◆◆◆

ピポポポポ・・・

「なぬ、気づかれた!」

接敵アラームの示す方に機体を向けると何かが高速でやって来る。

刹那、発火炎。

ザクは右肩を前に出し、腕を前にする事で弾は盾により跳弾する。

百里はザクの目の前をを高速で通り抜ける。

「速いな、戦闘機か・・・！足がある!？」

あれで正解なんだ・・・ と思っっているのも束の間、敵MSは反転してやって来る。

マサキはあのような機動をする兵器との戦い方については心得ているつもりだ。

高速で接近する機体は敵に向けて撃つ時間は限られている、僅かな短時間で精密に狙える訳も無し、故に狙いは少々大味になる。

じつと構え敵の射撃を待つ。

「どうしたの！止まってたらのにされるだけだよお!!」

「そこだッ！」

機体を僅かに横にずらし、その脇を弾が掠めていく。

振り向きざまにマシンガンを脚部スラスタを狙い撃つ・・・が、避けられる。

「ビューー！中々肝が据わってんねえ！」

「伊達に地球軌道上で溺れずに泳いできた訳では無いんでね!!」

「何言ってるの？」

そうして再度百里は此方に転回し迫って来る。

(要領は掴んだ・・・後は墜とすのみ！)

ザクと百里は相対し遂に・・・

『もういいミカ!!話は付いた!』



「タービンの艦とMSが離れてる！今だ!!」

イサリビはスモークを展開、その隙について急速接近。

MWに乗ったオルガ達をハンマーヘッドと交差している時に切り離し艦内へ侵入。

ダンテによるハッキングにより、換気装置と隔壁を操作不能に。可燃性ガスを撒きながら名瀬のいる艦橋まで一直線・・・。

というのがイサリビに戻った後に聞いた事の顛末だ。

仮にも規模のでかいヤクザの艦のハッキングをいとも簡単にこな

すとかダンテ名ハッカーかよ。



・・・団長がハンマーヘッドから帰ってきて、大体のこれからの事を聞かされた。

①ハーレムヤクザこと名瀬さんがテイワズ加入に前向きであり、かつそのテイワズのボスに案内してくれる事。

②ボスのいる歳星にタービンズと一緒に向かう事。

③火星本部がカツカツでfirecarな事・・・

そういう訳で火星にいる克蘭ク二尉に連絡を取る事にした。

「克蘭ク・ゼント二尉聞こえておりますでしょうか、サヤマ・マサキ伍長です」

「やめてくれないか、俺はもうGFでは無くなったんだ。」

「は、失礼しました。え、では克蘭クさん現在の火星の方、ダンジ達はどうなっているのですか?」

「今は主に体力作りと、勉強の方をデクスターさんと一緒に教えている。後は桜さんの手伝いだ。」

「なるほど」

「それと桜さんに聞いたんだがGFが周辺を聞き込みに回っているらしい」

「!」

「GFに生きていると知られると少々厄介な事になるな。私は脱走兵、鉄華団はそれを匿ったとしての罪で捕まってしまう。」

「めんどくさいことになりましたなあ」

「申し訳ない・・・元はといえば私の独りよがりだと言うのに」

「少なくとも今は大きくは動けませんなあ・・・」



GF 火星支部基地 アーレス

コーラルはいつも通りのMS訓練が終わると新江を呼ぶ。

「克蘭クは見つかったか?」

「は、最後に情報があった周辺を搜索しておりますが、やはり向かった方角的に鉄華団だと思われます。」

「生きてようが死んでようが兎に角MSを回収しなくては、変な所に流れて海賊に使われたらたまらん。」

「では鉄華団周辺を重点的に搜索致します。」

「必ず見つけるように。」

「はっ！」

コーラルsideも本格的に動き出す。

歳星

現在我々は歳星に向かっている。

「まだ歳星つてのにつかねえのー？もう10日も経ってるぜ」

ライドが窓に張り付き文句を垂れる。

それを横目で見ながらマサキはコーヒー片手に木星について思いを馳せていた。

マサキにとつて木星は木星船団公社がくそでかい船を用意して4年がかりで行くところであり、マサキのような一般ピープルにはとんと縁のない話であった。

しかし火星ですらあの様に住める今、木星もなんか上手いことしているに違いない。

あの野菜ジュースみたいな雲の下はどうなっているのか。期待で胸がいつぱいだ。

「マサキさん、歳星というのは惑星巡行船の事で木星の地表にある訳じゃないんですよ」

ビスケットの言葉に期待が脆くも崩れ去って行ったのであった。



大型惑星巡行船

歳星

「でつつつつか・・・！」

この一言に尽きるっ・・・!!! 圧倒的サイズっ・・・!!!

ドロス級ジ・オリジン版と互角かそれ以上の大型惑星巡行船に着いた鉄華団は団長、副団長、餅乾、三日月、クーデリアが歳星へ向かい、後はお留守番となった。

そして・・・

この一言に尽きるっ・・・!!! 圧倒的サイズっ・・・!!!

ハンマーヘッドから名瀬さんの奥方が手伝いに来ているのだが彼女らの圧倒的乳よ。

シノが夢中になるのも無理ないて。

「あ、マサキさん。ちよつといいですか？」

「うん？」



イサリビ格納庫

ヤマギに呼ばれて来たら、いきなりPADを渡され雪之丞さんから説明を受ける。

「マサキ、唐突でわりいんだがこのままだとかいつが壊れちまう。装甲や関節パーツ、消耗品を全とつかえしねえ事にはすぐダメになっちゃう」

「成程、やはりか」

作戦終了後には必ず整備交換点検してたのに、こっちに来てからは簡単な修理しかしてなかったからなあ。

まあおやつさん達は頑張ってくれてるけど・・・

「幸い今オルガ達がテイワズのリーダーと話をつけてくれているからな、設備が整っている歳星なら満足いく整備が出来るんじゃないやねえかな」



「鉄華団のテイワズ入りを祝って乾杯!!」

「おいおいまだ正式に決まった訳じゃ・・・」

その後オルガはグレイズの売却資金を盛大に使い飲む事となった。どう考えても集団率いて飲みに行くようなところでは無いのだが、まあ良いだろう。

「美味しいなあ」



「ジオン公国のお偉方♪禿に眉無しゴリラに狐♪みんなにちやほやお坊ちやま♪」

既にマサキは酔っ払いシノ達と二件目に行く話をしていた。

「それじゃ・・・行くカー・・・!!」

翌日・・・

「前が見えねエ」

トラブルがあったのかボコボコにされたマサキがベッドに横たわっていた。

「マサキさあぁん！調子はどうですかあぁあ！」

「そんなに怒鳴らなくなつて聞こえるよ・・・」

この前オルガが名瀬さんと会う際に船医の当てを見つけてもらった様に頼んだのだ、そして届いたのがアマミヤという女医だった。

来た当初は年少、年長共に胸にくぎ付けだったのだが・・・

声がかい、尋常じゃないぐらいデカいのだ。

アマミヤ曰く海賊相手の銃弾やまぬ戦地で働いていたので声がかくなつたとか・・・

(腕はいいらしいんだけどね・・・)

それと、ザクを歳星で整備してくれる事になつたらしい。

◆◆◆

ガーゼと包帯だらけのマサキは無理を押しして歳星のドックに来てみた。

「ああつ！まさかバルバトスをこの手でいじれる日が来るなんて！この美しいフレームデザイン！幻のツインリアクターシステム！・・・OSの阿頼耶識が生きてるなんて！」

整備長が興奮してまくし立てていた。

「・・・そんな機体を予算上限無しで整備出来るく！」

「すんませーん！すんませーん！！俺のザク知りません!?」

「むつ！君がああMSのパイロットか！ああMSは色々調べたいところがあるそうだから別のドックに置いてあるぞー！」

「わかりました」

◆◆◆

「何だこりゃ!？」

マサキが目にしたものは、殆どの装甲が取り払われ内骨格が露わになつているザクの姿だった。

そのザクの周りを防護服に身を包んだ研究者達が難しい顔で色々な所を見ていた。

その中の一人がこちらに気づいた様で、向かってきた。

「君がああMSのパイロットか」

「あ、はい。どうしたんですかあまりに大掛かりですけど」

「あのMS動力源に核を使ってるんだろ？熱核反応炉！私も長年核の研究をしていたがあんなデカイ物を見るのは初めてだ!!」

「アアソウナンデスカ」

話を聞いていると後ろからエーコ・タービンがやって来た。

「あつマサキも来てたんだ」

「エーコさん、この方々は？」

「この人たちは原子力について研究している学者さんなの、マサキのMSが珍しいから整備がてら見てるんだって」

「へえ・・・まあしつかり直してくれるに越したことはないがね」



「先ほど送付したファイルに詳細を書きましたが、現在核融合炉の解析は92%。只今複製品のパーツ作成に取り掛かります。」

「解った、まあ急がなくてもいい。下手に事故でも起こして嗅ぎつかれても面倒だからな」

「はっ」

テレビ電話が切れると、声の主マクマード・バリストーンが葉巻の灰をぐいと押し付けた。

「エイハブ・リアクターを使わないMS・・・か。面白くなってきやがったな・・・」

暗礁

歳星

クタン参型に括り付けられたバルバトスとザクは現在イサリビに向けて順調に進んでいた。

もつともザクはクタン参型との操縦の同期が出来ないのでパッドを用いて操縦している。

「あれがイサリビだな……っお?」

イサリビのブースターを確認した後、そのはるか奥で何か4つ程のMSのブースターが瞬いているのが見えた。

「ありやどう見ても訓練じゃないな。三日月イ!!」

「解ってる。おやつさんこのまま突っ込む。これのコントローल、そっちに返すね」

「はあ!? おめえ何言つて……操縦なんか! ……ぐオおおうう!!」

マサキの方もクタン参型のブースター出力全開で向かう。



「おい……うそだろ……ペドロが……」

マンロデイのコクピットを的確に太刀の一突きで仕留めた化け物MSにブルワーズのヒューマンデブリは怒りを露わにする。

そのまま怒りに任せてサブマシンガンを乱射しながら接近していくが、ペドロ機を盾にされた拳句ペドロ機を投げられ跳ね飛ばされる。

「なっ! くそっ! ……なっ!!」

「ビトー!!!」

パージしたマサキの乗ってたクタン参型が全速力でビトー機に激突し大爆発を起こす。

「なんだコイツ、ゴックみたいだけどー!」

クタン参型の質量でマンロデイの胴体は押しつぶされていた、この様子では即死だろう。

「ビトオー!!!」

「昭弘とタカキは一度イサリビに戻って、残りは俺達がやる」

「すまねえ!!」

◆◆◆

「ビトー!!ペドロー!!うわあああ!!!」

襲撃してきたMS隊を二人総出でたこ殴りにして撃破後、昭弘と合流する。

その時であった。

「このクダル・カデル様とグシオンをなめるんじゃないよ〜!」

カエルみたいな奴がゴツグ擬きを2機引き連れて昭弘に襲い掛かってくる。

「何だあいつ!!」

「あのがキども! 揃いも揃ってやられやがって! お前らはそのまま、あいつの相手は俺がする!」

至近距離でのミカの砲撃にもビクともせず高速で迫るそいつはミカの間合いに入るとグシオンハンマーを振りかぶる。

「くッ! コイツ…邪魔だッ マサキは先に昭弘の方に行つて」

「了解!」

「行かせはしない…ッ!」

グシオンがザクに行こうとすると、バルバトスが太刀で切り付けてくる。

「ちいッ!」

「お前らに手出しはさせない…」

バルバトスとグシオンは睨みあった後、戦闘に入った。

◆◆◆

「2対2…いや、昭弘はタカキを守ってるから1(&目標護衛)対2か」

ザクはブースター全開で昭弘を追いかけ、前方に三つの光点が映る。

「捉えたッッ!!」

マサキはマシンガンをデルマ機に向け撃つ。

「畜生後ろにいたのか！ 昌弘はグレイズを！ 俺は後ろの奴をやる！」

「わ！ わかった！」

デルマは反転し、マサキへ突撃する。

マンロディは背後から一撃で仕留めるべくスモーク弾を撃ち込んだ。

「煙幕だと！ このまま突っ切る！」

しかしマサキは煙幕に入るや否や加速する。

「馬鹿な！ こんな何も見えない所で加速するなんて！」

濃いスモークの中を加速していくザクをデルマは見失ってしまう。

「畜生、見失った！ 気を付ける昌弘！」

◆◆

加速し続けるザクはスモークから抜け出し、昭弘を追いかけるマンロディを見つける。

「待ちやがれこのオ!!」

「くそオ！ デルマは仕留め損ねたのか！」

マサキはさらに加速しマンロディを射程圏内に捕らえ、マシンガンを撃ち込むとマンロディのブースターから煙が噴き出し始めた。

「なっ！ ブースターがやられた！」

一つのブースターの急激に出力が下がり、暴走を抑えるために機体全体の出力が下がってしまう。

「このままじゃあいつに追いつかれるッ！」

「うおおおおおッ！」

一つ目のMSが光る斧を振り回しながら迫る。

昌弘は今も宇宙の何処かで泥を啜ってでも生きているであろう兄よりも、先に死ぬ事に申し訳なきを感じながらもペドロ達と一緒にこの生活を終われる事にどこか安堵していた。

「昌弘ツ——！」

「……ッ！ デルマ！」

オーバーヒートギリギリまで吹かしこんだデルマのマンロデイが横から割り込んで、昌弘の手を取り離脱した。

「昌弘！ 無事か！」

「あ！ ああ、だけど！」

後方からは一つ目、前方は新たに二機の新手が迫っており、クダルは旗色が悪いと判断したのか信号弾を撃ち出した。

◆◆◆◆◆

遠ざかる機体を見ながらマサキは呟く。

「逃げたか、仕留め損ねたなあ！ 昭弘、タカキは……」

「マサキさん！ 俺なら大丈夫です！」

少し苦しそうだが元気なタカキの声が返ってきた、MWなのに急な加速であればら数本いかれてるのではないか？

◆◆◆イサリビ◆◆◆

タカキを医者に渡した後、襲ってきた奴らについて会議が開かれた。

「海賊？ ブルワーズ？」

マサキは艦首に髑髏を携えた巨大な宇宙戦艦を思い浮かべる。

「アミダさんによるとブルワーズが奇襲をかけてくると予想されるポイントはこちら。厄祭戦のときに放棄されたモビルスーツや船の残骸が密集しているデブリ帯の中に回廊状の抜け道があるんです」

兎に角エイハブ・リアクターという万能重力装置が戦争後回収されず放置されている為出来たデブリ帯に潜んでいるという。

そのままデブリに巻き込まれて星の屑になりやいのいのに。

「本当なら二日月とラフタさんが注意を引きつけている間に、船内に入り込んで制圧するのが定石ですが……」

そういうとビスケットはマサキのほうを見る。

「ハン？」



「成程ね」

眼前では丁度、化けガエルとバルバトスが相対しており、アミダはイサリビの直掩に、ほか三人もブルワーズ相手に大暴れ。

シノ達も敵本船に乗り込む頃合いだろう。

マサキは極力目立たぬようにエアーのみでブルワーズ本船に前進する。

……デリアって女を手に入れりやあ勝ちなんだ！ こっちは船に取りついたヤツらの相手をする。お前は外からヤツらの船を潰せ！」

カバヤンはクダルに命令すると、船内のモニターを確認する。

「くっそ〜。とつとと始末しろ……えッ……」

カバヤンは余りの光景に絶句する。

眼前に真っ赤な目玉が現れたと思うや、MSが現れバズーカを艦橋に突き付けて接触回線で話しかけてきた。

「今ここで我々に降伏しなけりやお前らをここで吹き飛ばす！」